

三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

号
7 2012.9

企画展特集

山本有三の文学修行 海外との交流・役者との出会い

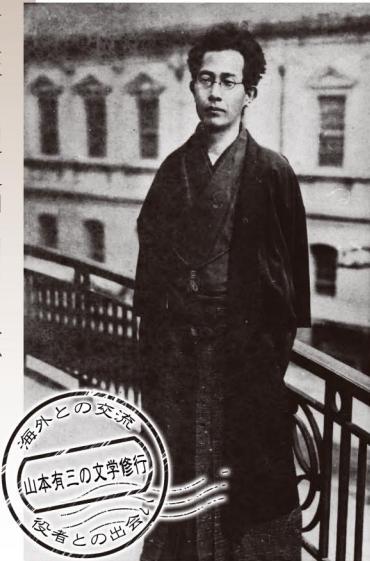
山本有三は一高在学中の明治43年に初めての戯曲「穴」を執筆しました。進学した東京帝大では土屋文明、久米正雄、菊池寛ら後に歌人や作家となる友人と出会い、文学の世界へと歩みを進めていきます。座付作者や雌伏時代を経験した有三はやがて、近代演劇史に残る作品を執筆しました。

本展では、学生時代の習作「穴」や座付作者を辞した後に打ち込んだストリンドベリ、シュニッツラーの翻訳、初めて脚光をあびた「生命の冠」など、一流の劇作家となるまでの修業時代に光を当てています。これまでも指摘してきたドイツ文学の影響だけでなく、世界の潮流の中に有三はどのように位置づけられるのか。また有三が役者をどのように捉え、作品にどう影響しているか。新たな視点から有三の文学修行を考えようとするものです。一人の文学青年が劇作家・山本有三になるまでの歩みをどうぞご覧ください。

会期：2012年9月15日—2013年2月24日

戯曲「穴」 山本染瓦 作

（展示室から）



卒業前後数箇月間新派劇に関係したが、深く感するところあり、幕内の生活から手を切つて、静かにストリンドベリイの「死の舞踏」の翻訳に専念した。

文学は子供の時から好きであったが、真摯に文学に志すやうになつたのは

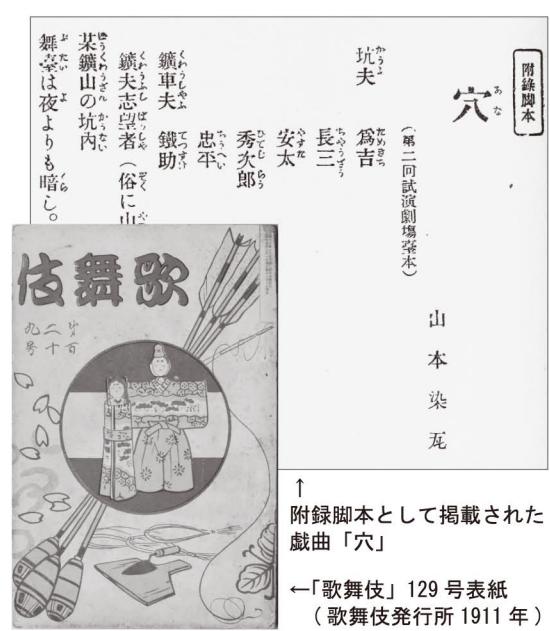
この時以後といふ方が当たつてゐるかもしだれない。

「山本染瓦」という名は、「穴」の発表だけに使わ

有三は明治43年8月に鉱毒事件で知られる栃木の足尾銅山を訪れ、坑内を舞台とした一幕物の「穴」を執筆しました。これが友人の手から川村花菱に渡り、更に伊原青々園へと届けられ、青々園主宰の「歌舞伎」に掲載されました。同じ頃、東京俳優学校の「試演劇場」第二回公演で「穴」が初演されると、幸運にも恵まれています。

展示室では、資料に記載されている著作者の名前に、ぜひご注目ください。

（文芸企画員・学芸員 渡辺美知代）



特別寄稿

生きて生きて、 死んで死んで、

小西優司

山本有三の戯曲『同志の人々』に出演したのは、実際には今回で三度目。一度目はまだ19歳だった。演じたのは橋口吉乃丞、二度目は確か26歳のときで堤小兵衛、そして三度目が2011年9月に上演したときで田中河内介。演出についたのは二度目のときから。僕の中で山本有三作品の第一印象は「それでも生きていく」というような生への観念。それはあるときはポジティブな想いであり、あるときは是非もない諦観を伴うものであつたりと、生きしていくということに秘められた本質的な観念を表現する作品ばかり。その中でもこの『同志の人々』は、「それでも人は生きていかねばならず、生きていく限りは生きる意味を持たなければならない」という切実な作品だと感じていた。

幕末の薩摩藩士、寺田屋騒動により囚われの身となつた若い勤皇の志士たちは志なればにして藩へと護送され、その船中において先導者であり指導者である田中河内介ならびにその息子である嵯磨介さまでを殺害するように命じられる、自分たちの

い。大切なのは脚本が、そして作者が言わんとすることを切実とも言える方法で突き詰めていくこと、それこそが僕の演出スタイルだし、この作品を選んだ本当の意味だし、おためごかしのものを作るのはどうしても嫌だった。

命を助けてやるという条件と引き換えに。不条理劇、といつてしまえばあまりに簡単だし、ただ限りなく史実・歴史に近いこの物語を当初はどのよう演じるか、どのように演出するか企画段階ではかなり困った。困ったというと適当ではないかも知れないけど、池袋演劇祭、という賞レースに出品するにあたって、エンターテイメント性、観客の娛樂性を考えたら多少台本のあり方を変えてでも、面白く容易にすべきかという部分と、そうではなく、劇の本質に限りなく近い形で緊張感を継続させ、命をかけて日本を変えようとした若者たちの物語を作るかと、その二つの部分でかなり熟考を強いられた。賞レースに勝利すれば「勝てば官軍」という絶対の評価が存在するし、そうじやなければわざわざ出品して自分たちのスタイルなどというものを世間のふるいにかけたりする必要なんかないのだから。

結果として僕が選んだのは、劇世界の本質で上

だから、と言えばいいのだろうか。稽古は非常に重苦しいものとなつた。何せ、命なんか賭けたことがないのだ、みんな。当たり前だ。日本には戦争もない、侵略もない、死の伝染病すらいまは少ない。そんな人生しか送つてこなかつた平均年齢28歳そこそこの役者ばかりを集めて「命を賭けて下さい、そこにしか未来はない」と演出の僕は言い続けているのだ。型や段取りよりも台詞の一つ



「同志の人々」

脚本 / 山本有三 演出 / 小西優司

演劇集団アクト青山 2011年9月 シアターKASSAI

一つに、動きの一挙手一投足に、本当に生を望む切実さがあるか？生きる希望に付随している悲しい現実という二律背反の中、闘っているか、そればかりを求めて叫んだ。稽古は常に困惑と出口のない迷宮の中をのろのろと進んだ。でも、眞実はどうだろうか？僕はそう考えていた。本当にみんな命を賭けたことがないか、夢はないか、挫折は？僕らだって勤皇の志士ほどではないにしろ、それぞれがそれぞれの人生を必死に、命がけで生きていることに変わりはないんじやないだろうか？それなら、今の僕らにだって体現できるもの、表現できることがあるんじやないだろうか。そう自問自答しながら稽古すると同時に、役者一人ひとりと向き合い、何度も話し合い、みんなで食事をしたり、馬鹿騒ぎをしたり、遊びに行ったり、そんな中で生まれた一体感はやがて池袋演劇祭における前夜祭でのCM大会で僕らに優秀賞をもたらした。斬りたくない相手を斬り、

折は？僕らだって勤皇の志士ほどではないにしろ、それぞれがそれぞれの人生を必死に、命がけで生きていることに変わりはないんじやないだろうか？それなら、今の僕らにだって体現できるもの、表現できることがあるんじやないだろうか。そう自問自答しながら稽古すると同時に、役者一人ひとりと向き合い、何度も話し合い、みんなで食事をしたり、馬鹿騒ぎをしたり、遊びに行ったり、そんな中で生まれた一体感はやがて池袋演劇祭における前夜祭でのCM大会で僕らに優秀賞をもたらした。斬りたくない相手を斬り、

折は？僕らだって勤皇の志士ほどではないにしろ、それぞれがそれぞれの人生を必死に、命がけで生きていることに変わりはないんじやないだろうか？それなら、今の僕らにだって体現できるもの、表現できることがあるんじやないだろうか。そう自問自答しながら稽古すると同時に、役者一人ひとりと向き合い、何度も話し合い、みんなで食事をしたり、馬鹿騒ぎをしたり、遊びに行ったり、そんな中で生まれた一体感はやがて池袋演劇祭における前夜祭でのCM大会で僕らに優秀賞をもたらした。斬りたくない相手を斬り、

折は？僕らだって勤皇の志士ほどではないにしろ、それぞれがそれぞれの人生を必死に、命がけで生きていることに変わりはないんじやないだろうか？それなら、今の僕らにだって体現できるもの、表現できることがあるんじやないだろうか。そう自問自答しながら稽古すると同時に、役者一人ひとりと向き合い、何度も話し合い、みんなで食事をしたり、馬鹿騒ぎをしたり、遊びに行ったり、そんな中で生まれた一体感はやがて池袋演劇祭における前夜祭でのCM大会で僕らに優秀賞をもたらした。斬りたくない相手を斬り、

折は？僕らだって勤皇の志士ほどではないにしろ、それぞれがそれぞれの人生を必死に、命がけで生きていることに変わりはないんじやないだろうか？それなら、今の僕らにだって体現できるもの、表現できることがあるんじやないだろうか。そう自問自答しながら稽古すると同時に、役者一人ひとりと向き合い、何度も話し合い、みんなで食事をしたり、馬鹿騒ぎをしたり、遊びに行ったり、そんな中で生まれた一体感はやがて池袋演劇祭における前夜祭でのCM大会で僕らに優秀賞をもたらした。斬りたくない相手を斬り、

折は？僕らだって勤皇の志士ほどではないにしろ、それぞれがそれぞれの人生を必死に、命がけで生きていることに変わりはないんじやないだろうか？それなら、今の僕らにだって体現できるもの、表現できることがあるんじやないだろうか。そう自問自答しながら稽古すると同時に、役者一人ひとりと向き合い、何度も話し合い、みんなで食事をしたり、馬鹿騒ぎをしたり、遊びに行ったり、そんな中で生まれた一体感はやがて池袋演劇祭における前夜祭でのCM大会で僕らに優秀賞をもたらした。斬りたくない相手を斬り、

その上で思うことがある。演劇祭の受賞を逃しても、僕らはまた舞台に立つ。僕らはこれからも演劇の現場にいる。これまでと変わることなく。僕らは多かれ少なかれ挫折を味わつたし、岐路に立たされたし、選択を迫られた。それでも、それでもある。演劇の道は諦めないし閉ざされない。それは『同志の人々』において僕の演じた田中河内介が切腹の際、是枝に伝えていた言葉に似ている。

「貴殿はなぜ、われわれのこの思いを生かしてくださるとはなさらないので。なぜこの心を成就させようとは、努められないのです。これを

生かしてくれることが、これを成就させることが、生きている者の務めではありませんか。」

生きていくことは、続けていくということとは、そこを離れた者たちの想いを背負い、そこには、そこを離れた者たちの夢を見ていくこと、その成就是誰か、仲間、夢、そういうものが人生を支え、彩り、昨日よりも素晴らしいと信じ得る未来を創りだすこと。それこそが山本有三作品に描かれた本質だと僕は思った。

でも、と言えばいいか、それとも案の定と書くのが正解か。残念ながら演劇祭大賞には一つも選ばれなかつた。拙かつたこともあるだろう。演劇＝娯楽という観念からすれば全く逆であつたこともあるだろう。理由はともかく、僕らは全ての賞を逃した。もちろん、賞そのものが演劇の全てでないことはよくわかっているし、それ自分が目的でないこともきちんと理解していた。それでも、残念で悔しいという気持ちは拭うことができなかつたし、しばらくは出演者全員がショックを隠しきれなかつた。

でも、と言えばいいか、それとも案の定と書くのが正解か。残念ながら演劇祭大賞には一つも選ばれなかつた。拙かつたこともあるだろう。演劇＝娯楽という観念からすれば全く逆であつたこともあるだろう。理由はともかく、僕らは全ての賞を逃した。もちろん、賞そのものが演劇の全てでないことはよくわかっているし、それ自分が目的でないこともきちんと理解していた。それでも、残念で悔しいという気持ちは拭うことができなかつたし、しばらくは出演者全員がショックを隠しきれなかつた。

小西優司 こにし まさとし

1977年6月生まれ。京都出身。高校卒業後、1年余りをイタリアで過ごす。帰国後、演劇集団アクト青山の前身であるアクト青山ドラマティック・スクールに入所し演劇活動を開始。2009年に演劇集団アクト青山主宰に就任。美しい日本語を話す若手演劇集団、をスローガンに主として近代古典の演目を年に10作品以上も出演・演出する。



ガイドボランティアリポート7

記念館で活動中のガイドボランティアより交代でリポートをお届けします

「皆さんに囲まれて活動、早5年目に突入！」

出先で偶然に出会った「おとぎの国」に出てくるような西洋館で月に一度、来館者の方々とおしゃべりさせていただくことになるとは、人生とは不思議なものです。

いつも感心させられているのは、学芸員さんが半年毎に企画展のテーマをかけ、職員の皆さんでこの山本有三記念館を盛り上げておられるということ。私はそのおかげで飽きることなくボランティア活動を続けてこられました。今後どれだけのテーマが生まれるのか、どのように情報発信していくのか、私たちの活動の形も日々変っていく予感がしています。

(綾部 博子)

「路傍の石」

記念館の門前にある大きな石。案内板に名作を記念する石と記されています。路傍の石というより腰がしっかりと据わってみえるほどに大きい。

吉野源三郎は、治安維持法にひつかかって入獄し、困難な時期がありました。有三の依頼を受け、『君たちはどう生きるか』を書いた吉野は、「山本さんの奥にあるものが激しく噴出し、無償の好意を私に注いでくれた」と語っています。

門前におかれた石は、吾一少年への思いと共に、有三の公憲ともいえる激情に貫かれ、奥深く熟しているのかもしれません。今も太陽を浴びてそこに在ります。

(臼井 邦子)

▶事業報告①

講演会「山本有三の光と影」



講師：池内紀

ドイツ文学者・エッセイストとして知られる池内紀さんは、三鷹市在住35年になります。山本有三は東京帝国大学の獨文科を卒業しており、「心に太陽を持て」もドイツの詩を有三が翻訳したものです。本講演会では三鷹・ドイツ文学という二つのご縁がある池内さんに、今あらためて有三作品を読み直しその生き方を問い合わせた時、何が見えてくるかという点に注目しつつお話をいただきました。「心に太陽を持て」の詳しい解説や、昭和10年代の社会状況についてなど、非常に中身の濃い90分間でした。（3月24日実施）

▶事業報告②

春の朗読コンサート

朗読と毎年異なる楽器とのアンサンブルが好評をいただいている朗読コンサート。4回目の今年は、新進チェロ奏者の鈴木皓矢さんをお迎えしました。定員45名に対し、200通を超えるお申し込みをいただきました。



チェロ：鈴木皓矢

朗読：野田香苗

朗読にチェロの音色が重なると、記念館全体が響きに包まれたようで、アンケートにも「情景が浮かんでくるようだった」「作品を暗誦したくなかった」といった声が寄せられました。来年はどのようなプログラムになるか、どうぞお楽しみに！（5月19日実施）

▶オリジナルグッズ紹介

クリアファイル

記念館のオリジナルグッズ、ポストカードセットと一筆箋に、クリアファイルが新たに仲間入りしました。建物の見所をたくさんつめこんだA4サイズはダブルポケットで書類もたっぷり入ります。A5サイズは『心に太陽を持て』の初版本をほぼ実物大で再現。チケットやレシートの保管おすすめです。記念館と財団ホームページの通販ストアで販売しております。

左下：A4クリアファイル 500円
右下：A5クリアファイル 350円



編集・発行

三鷹市山本有三記念館

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀2-12-27 電話 0422-42-6233 ホームページ <http://mitaka.jpn.org/yuzo/>

開館時間：午前9時30分～午後5時

休館日：月曜日及び年末年始（12月29日～1月4日）※月曜日が祝日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館。

入館料：300円（20名以上の団体200円）※中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭は無料。

アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分、JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口（公園口）より徒歩20分